

宮城県白石市大平 鉢森山伝承の館跡について

佐藤 充（あずま街道探訪会）

1. はじめに

白石盆地の西側に鎮座する標高 576m の鉢森山は、鉢を伏せたような山容なのでつけられたと伝えられている。地元住人は鉢森山を「西山」「にっしゃま」と呼んでいる。当山周辺の地理状況は、狹隘谷底地形の白石盆地のほぼ中央を、南から流れる斎が川（国土地理院地図では「斎川」。以後「斎が川」という）は暴れ川と言われ、谷底平野・氾濫原である。当山の東斜面は急峻な崖地形で形成された複合扇状地である。南の越河と同様に山間と狹隘の谷底地形のため、交通の難所といわれてきた。戦国時代以前までは軍事上では要衝の地であり、大和時代から時の中央政権の領土拡大と在住豪族との領土侵害争いの地でもあった。伝承として、用明天皇、坂上田村麻呂、源頼義・義家親子、あるいは鎌倉政権樹立を目論む頼朝と奥州の平泉藤原との激戦地や南北朝・戦国時代の多数の館跡等がある。



第1図 鉢森山周辺図及び遺跡位置（宮城県遺跡地図・国土地理院地図から）

昔話や伝説や神社祭事を地域独自の文化として捉えると、何か教示されるものがあり次世代に少しでも繋げていければと考え、史跡の現地調査や昔の地理状況や昔話や伝説を地元の人から聞き取り調査を行い、書き留めた。その中で陣屋、館として伝承されてきた跡を紹介したい。

2. 陣屋、館跡の伝承資料及び調査

調査に至る経過

2019年10月の台風によって、白石市南町の旧字「^{はげやま}兀山」では土砂崩れが起き、片倉信光氏の収集資料も被害を受けた。筆者宅が片倉氏宅の隣にあるよしみから、旧蔵されていた資料に接する機会があった。その中には、片倉氏が鉢森山の館跡を現地踏査した折に作成した略図を含む記録類も含まれていた。

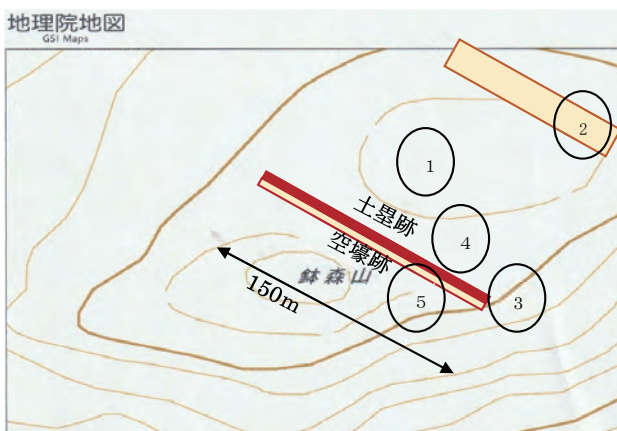
筆者は以前に風間観静氏（1984）や中橋彰吾氏（1997）が唱えた「あずま街道」西廻り説に関心を持ち、調査を重ねて来た（あずま街道探訪会 2018a・2018b）。ここに報告する鉢森山周辺の現地調査は、2020年1月～4月にかけて、佐久間良男氏とともに行ったものである。

①鉢森山陣屋跡：白石市大平森合鉢森山

宮城県遺跡地名表には「立地：丘陵、種別：散布地・陣屋、時代：縄文・中世、出土品：石鏃」とある。

『白石市史』3の（2）特別史下の（1）「白石地方の伝承 鉢森山」（飯沼 1984）には、「前九年役（1051～1062）で安倍貞任などを討つため奥州に下った八幡太郎義家が陣所としたと「安永風土記御用書出」（以後「安永」という。仙台藩が安永年間（1772～1781）に村或いは知行所単位に「風土記御用書出」として提出させたもの）に記される。山頂に約200mほどの空濠らしい跡が残されている。お寺も建て、四坊平という地名も残されている。井戸らしい物や物見台・札立場などあったという。また、破魔射場（はまいば）といって、鉢森山道附近に七、八間四方（13m前後）の広場があるが、「安永」には、義家が軍神祭の矢初（やそ）をしたところと伝えられている」とある（註1）。

頂上部分は全面的に雑木林。①比較的平坦な平場を呈している。②この北側にわずかに段差のある地形。③～⑤頂上を二分するように、土塁の地形が東西方向にあることを確認。土塁北側（陣屋側）から高さ1mくらいあり、土塁南側の空壕底から1.5mくらいある。（○内番号は写真と付合）



① 鉢森山陣屋跡（国土地理院地図から）
○内番号は第3図写真と符合



② 鉢森山陣屋跡（Google Earth から）
2020.11.17 撮影画像

第2図 鉢森山陣屋跡



① 南東端から西方向の平坦な状況



③平場 北側にある土塁らしきものと段差の地形が見られる（茶破線）。



③頂上の東側の林道（左）沿いに土盛りされた土塁跡（右）を確認できる（茶破線）。



④土塁跡（左）からの西方向撮影。土塁の右側が館の内側になる。



⑤空堀跡（中央の窪み） 右側が土塁の形状を呈している（茶破線）。

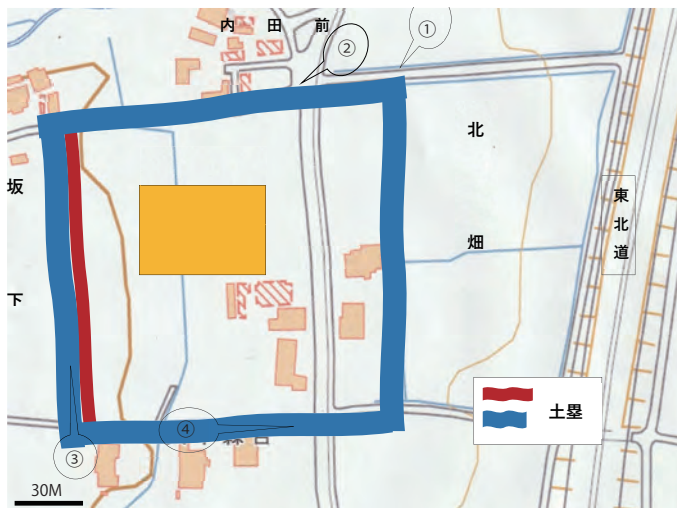
2020年（令和2年）4月25日、佐藤充・佐久間良男氏調査。

第3図 鉢森山陣屋跡の調査

②古御所内跡：白石市大平森合字北畑前

宮城県遺跡地名表に「立地：丘陵、種別：陣屋、時代：中世」、「安永」には「古御所内 右ハ文治年中頼朝公錦戸太郎御責被遊候節御所跡之申傳候當時ハ郭之堀等不残田畑二能成候事」とある。

「白石地方の伝承 古御所内」（飯沼 1984）には「源頼義・義家父子の鉢森山にあった陣所は、冬になると麓に下がり、父頼義は御所内へ、義家は幕の内に陣を取った」とある。



①片倉信光（1968）を下に南北約 100m、東西約 120mの規模の陣屋であったと想定される。円形吹き出しの番号は第 5 図写真に付合。

②古御所内遺跡（Google Earth から）
2020.11.17 撮影画像

2020 年（令和 2 年）1 月 19 日調査。

第 4 図 古御所内跡



①御所内跡の北東隅から南西方向に撮影。写真中央のコンクリート擁壁部分の上部分が古御所内跡。



②古御所内跡の北東側から西方向に撮影。源義家の守り本尊を祀るという森合観音堂へと小道は続く。



③古御所内跡の南西側から北方向に撮影。写真中央の土堤が土塁跡。古御所内跡の北西端まで南北に続く。



④古御所内跡の南辺を東方向に撮影。写真左側が若干高まっている。

第 5 図 古御所内跡の調査

③幕ノ内遺跡：白石市大平森合字幕ノ内

宮城県遺跡地名表には「立地：丘陵 種別：散布地、陣屋 時代：古代。中世出土品須恵器」、白石市史には「伝承によると、前九年の役のとき、源義家の宿营地だと称している」（飯沼 1984）とある。

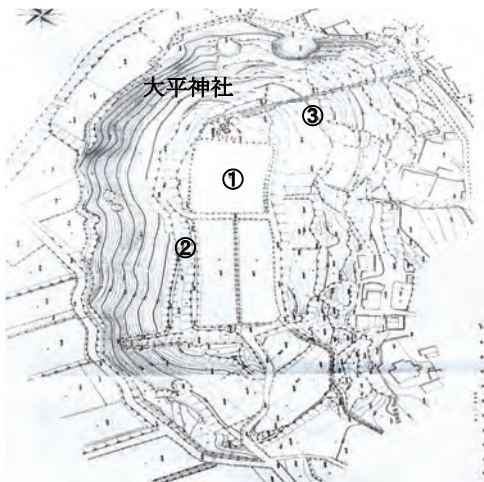
④泰衡館（太平館）跡：白石市大平中目字太平前

宮城県遺跡地名表には「立地：丘陵 種別：陣屋 時代：中世」、白石市史には「太平山 藤原泰衡が築いたといわれる。」（飯沼 1984）とある。



高橋宅屋敷の北側にある土盛り。源義家の宿営時の土塁と想定。

第6図 幕ノ内遺跡の調査



泰衡（太平）館遺構図（白石市史から複写）
○内番号は写真と付合



泰衡館跡（Google Earth から）
2020.11.17 撮影画像



泰衡館跡南東側空の全景。写真中央が国道4号線。
写真左側の背景が鉢森山の稜線。



①大平神社境内南側は広い平場があり、現在、
柿が植栽されている。



②境内には土塁が残っている。



③境内東側にある曲輪の平場。

第7図 泰衡館跡の調査

4. おわりに

約 40 年前の市史発行時と比較すると少数が伝承されていることが分かった。今後も明るい展望は見えないが、後世に受け継ぐための「歴史の伝承」を図ることを望んでいる。最後にこの地区の歴史・伝承調査にご協力を頂きました方々に感謝申し上げます。

註

1) 片倉信光編 1958『郷土の話し』(白石第一小学校社会科資料 3) には、鉢森山は「小原山」として、以下のようにほぼ同様の伝承が記されている。少し長文になるが、引用する。「……源義家は父親の頼義というえらい大将といっしょにエゾを征伐に来た人で刈田郡にはこの人たちの陣を張ったと云う場所も伝えられています。それは「小原山」です。あの小原山の上には、今でも空堀の跡や館のあとが、はっきりとのこっていますし、その頃お寺も建てたと云う「四坊平」という場所も残っていますが、ここは其時、賊が早く降参して国が平和になるように祈願をこめるために寺をたてたところだと云います。又附近には井戸の跡や陣屋をたてた時の土台石とか、物見岩や札立場、御仕置場などがあったところと伝えられています。今大平村(小原山のふもと)中目・森合などには「幕の内・御所の内・赤毛屋敷」等というところがありますが、それも丁度この時(前九年役)に小原山の上に陣をとっていて冬になったので敵の来ない時は山を下って、ふもとの村々に宿っていたためだと云い、頼義がいた処が「御所の内」、義家のいたところが「幕の内」、又頼義の乗っていた赤毛という愛馬を葬ったところが「赤毛屋敷」だと云っています。先年赤毛屋敷で畑をほった時、馬のくつわや其の他馬具が掘出されたので馬を葬ったと云ういい伝えが正しかったとそれを再び丁寧に埋めたこともありました。こんな云い伝えにある頼義・義家などというえらい大将は一体誰と戦ったのでしょうか。(以下、略)」

引用・参考文献

- 刈田郡教育会編 1928『刈田郡誌 全』
 宮城県史編纂員会 1954「風土記御用書出等 刈田郡」『宮城県史』第 23 資料編第 1
 片倉信光編 1958『郷土の話し』白石第一小学校社会科資料 3
 片倉信光 1968「森合めぐり」『白石市郷土研究会会報』第 1 号
 風間観静 1984「地名の研究」『白石市史』3 の(2)
 飯沼寅治 1984「白石地方の伝承」『白石市史』3 の(2)
 中橋彰吾 1997「幻の東街道を求めて」『広報しろいし』第 458 号
 あずま街道探訪会 2018a『古道「あずま街道」調査報告書』
 あずま街道探訪会 2018b『古道あずま街道を訪ねる』
 相原淳一 2019「「吾妻海道」と片倉氏入部以前の白石—佐藤 潤先生調整「佐近商店包紙の図」から—」
 『仙台郷土研究』復刊第 44 巻第 2 号
 八島忠賢・佐藤 充 2021『西山物語』^{にっしやま}嘉右衛門ケヤキ会
 宮城県遺跡地図・地名表(インターネット 2021 年版)